

コロナ禍における保育園へのリモート音楽会から 乳幼児の音楽活動を考える —保育者と学生へのアンケート調査の結果から—

永津利衣*

Implication for Infant and Children's Music Activities through a Remote Concert in a Nursery School during COVID-19 Crisis : Based on the Results of a Questionnaire Survey of Childcare Workers and Students

Rie Nagatsu

概要：新型コロナ感染拡大により急きょリモートで行った保育園とのクリスマス音楽会実施後の保育者と学生へのアンケート調査の結果から、乳幼児への音楽活動について考察した。乳幼児期では実体験を重視するとしながらも、リモートでもプログラムの内容や実施方法を工夫した音楽会を提供することで、子どもの音楽的な表現に影響を与えたことが明らかになった。また、リモート音楽会の実施はコロナ禍の子ども達が園以外の人と音楽で交流でき、ハンドベルや手話ソングのような文化に触れ、保育者や友達と一緒に音楽に親しむ機会を提供できた。そのとき、子どもの音楽活動を支えるため、保育者がさまざまな子どもの姿を解釈して受容すること、音楽活動へ誘ったり一緒に楽しんだりする保育者の働きかけといった人的環境としての保育者の役割と、保育者の音楽性の重要性が見出された。

キーワード：リモート音楽会、保育者養成、音楽活動

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大により、令和2年はさまざまな音楽活動が制限付きや中止に追い込まれた。このような中、保育士養成課程の筆者の担当するゼミでは、北海道X市にあるA保育園（以下A園）で行う予定であったクリスマス音楽会を、急きょWeb会議システムを用いた方法に変更してリモートで実施した。本論では、このリモート音楽会の実施後に行った保育者と学生へのアンケート調査から、画面を通じた音楽活動に対して乳幼児がどのように参加していたのか、また、どのような影響があったのか、そして、参加した保育者および実施した学生がどのように感じたり考えたりしたのかを明らかにする。その上で乳幼児への音楽活動でどのようなことが起こり、何が子どもの音楽活動を支えるために大切なのか考察することを目的とした。

Weblio 辞書によると、オンラインとは「端末がインターネットなどの通信回線に接続

*：保育学科 連絡先：nagatsu@takushoku-hc.ac.jp

されていること」、リモートとは「複数の対象が離れている状態」を意味する。また、「リモート音楽会」、「オンライン音楽会」とインターネット検索すると、営利的なコンサートや個人配信の演奏、有名音楽家によるワンポイントレッスンなど、多様な音楽活動がさまざまな呼び方で展開されており、用語として確定していないと考えられた。本取組はオンラインを利用した同時双方向の交流をしつつ、予め録画した DVD 再生による演奏を併用したハイブリッドの方法をとったため、「リモート音楽会」と称することにした。当初は DVD 利用を予定しておらず、また、「オンライン〇〇（授業、ショッピングなど）」が多用されていたため、園との連絡やアンケート調査では「オンライン音楽会」の語を用いていた。その経緯から、本文中では「オンライン」の語も用いている。

2. リモート音楽会の概要

2. 1 経緯と通信機器の準備

リモート音楽会の実施に至るまでに、以下のようにコロナの感染状況と通信環境が大きく影響した。その経緯についてここに記録した。

令和 2 年夏、北海道内の新型コロナ感染状況がやや落ち着いたため、A 園が主催するクリスマス会での演奏の要請を受けた。しかし、11 月に入り道内の感染者数が 200 名を超えて急増した。子ども達が楽しみにしているクリスマス会と、生の音楽に触れる機会を切望する園長と電話で連絡を取りながら、感染者数の推移を見守った。その中で、A 園までの移動および楽器の運搬計画を立てながら、オンラインを利用した同時双方向での音楽会の方法を検討した。この段階では、演奏時のタイムラグとハウリングという音楽にとって致命的な不具合を回避するため、演奏時のみ本学側のスピーカーを消音にすることを想定した。この対処法では、演奏時に遅れて聞こえる音声による混乱を解消できるが、子どもの歌声を聞くことができなくなる。現在の技術ではやむを得ない選択であった。12 月を目前に感染状況は悪化したままであったため、オンライン会議システムの Zoom を用いた実施を決定した。加えて、同じ法人の B 保育園（以下 B 園）のクリスマス会で予定していた公演が中止となり、こちらも引き受けることになった。なお、この 2 園は毎年、道外からマーチング指導者を招聘していたが、感染防止策として Zoom を用いた指導に切り替えており、年長児はオンラインでの遠隔指導の経験があった。

通信関連では、A 園との通信テストで音声と映像に乱れが生じた。そこで、安定した演奏を聴いてもらうために、予め演奏を DVD に録画して両園に届けた。一方、B 園の遊戯室ではインターネット接続ができないことが判明し、急きょ別の通信方法を探って Zoom の利用に至った。短大側の窓のブラインドを下したことで通信状況が悪化することもあった。後に映像の専門業者に聞いたところ、音楽を遠隔で扱う場合は有線が基本とのことであった。このように不慣れの中、通信環境や通信機器を試行錯誤しながら整えた。

2. 2 通信機器の設置方法

A 園または B 園の遊戯室と本学のリズム室を、ノートパソコン（以下 PC）から Zoom を開いてつないだ（図 1）。ここでは本学側の機器の設置について述べる。

映像の入力：PC 内蔵カメラ

音声の出力：コンデンサーマイク（オーディオテクニカ、オーディオ・インターフェイス

Steinberg,Cl2+経由で PC に接続)

映像・音声の出力：電子黒板

A 園では Zoom 用の画面が子ども前で、DVD 視聴用の画面が斜め前に、B 園では Zoom 用の画面と DVD 視聴用の画面がそれぞれ子ども前に置かれていた。



図 1 B 保育園との交流の様子

2. 3 リモート音楽会の実施方法

プログラムを表 1 に示した。同時双方向で学生が司会進行し、各曲の前に動きの説明と練習、ハンドベルの説明とデモンストレーションを行った。その後、DVD の演奏動画を視聴してもらった。歌詞の中で子ども達にとってなじみのある「トナカイ」「サンタクロース」やオノマトペの部分に、手話や振り付けの動きを付けた。動きを伴うことで、歌の世界を身近に感じながらリズムカルにより楽しく、みんなで一緒に歌うことができ（伊藤 2002, p.3), それとともに、画面に注目を促すことができると考えたためである。DVD の録画では、学生はベルが目立つように黒い上衣でそろえ、クリスマスらしい帽子を付けた。学内での感染防止のため、オンラインの時も DVD 録画の時もマスクを着用した。

日時：A 園へのクリスマス音楽会 12 月 9 日 3 歳未満児：10 時 00 分～10 時 20 分

3 歳以上児：10 時 30 分～10 時 50 分

B 園へのクリスマス音楽会 12 月 14 日 10 時 30 分～10 時 50 分

表 1 プログラム

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 歌「あわてんぼうのサンタクロース」(3 歳未満児は 2 番まで)<ul style="list-style-type: none">・「リンリン…」などのオノマトペ部分に学生が振りを考え、動きを付けて歌った。2. ハンドベル¹⁾ 演奏「ホールニューワールド」3. 手話ソング「赤鼻のトナカイ」²⁾<ul style="list-style-type: none">・手話の中で「トナカイ」「サンタクロース」は子どもに説明し練習した。 <p>※ピアノ伴奏は学生が担当した。</p> |
|--|

3 アンケート調査

3. 1 概要

調査目的：保育者と学生それぞれの視点から、画面を通した音楽活動に対して、子ども達がどのように参加していたか、また、相互交流がどのように行われていたか、その音楽活動は、実施後、子ども達にどのような影響を与えたか(保育者のみ)、リモートで音楽会を行うことをどう考えたり感じたりしたか、について明らかにする。

調査対象：音楽会を実施したゼミ学生(保育士養成課程 1 年生 8 名)、A 園・B 園のクリスマス音楽会に参加した保育者

調査時期：音楽会実施後に配布し、学生には 3 日程で回収した。各園での配布・回収は園長、主任に依頼した。

調査の内容：表 2 に保育者への質問項目、表 3 に学生への質問項目を示した。保育者には各年齢の子どもの様子を知るため、音楽会の時に入った担当クラスをたずねた。研究倫理：法人理事長、園長、A 園・B 園の保育者、学生に対し、アンケート調査の目的と結果の使用、個人情報の保護について、口頭もしくは書面にて説明した。同意の場合のみ、無記名で回答し提出してもらった。学生には回答内容は成績に影響しないことを伝え、画像の使用の許可を得た。

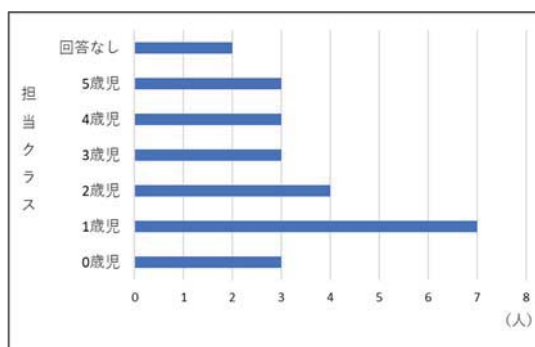


図 2 保育者の担当クラス

表 2 保育者対象のアンケート調査

<ol style="list-style-type: none"> 1. 「赤鼻のトナカイ」「あわてんぼうのサンタクロース」の歌の活動でのお子様について、見られた様子や、先生方のお気づきの点やご感想をご記入ください。 2. ハンドベルを鑑賞中のお子様について、見られた様子や、それに対する先生方のお気づきの点やご感想をご記入ください。 3. お子様方と学生とのオンラインでの交流（会話や動作を中心としたやりとり）について、お気づきの点やご感想をご記入ください。 4. 音楽会終了後、保育室でのお子様に関する音楽に関していつもとは異なる様子がありましたか。（「あった・なかった」を○で囲む）「あった」場合、そのときの様子をお教えてください。 5. コロナ禍にかかわらず、今後、オンラインによる音楽会を行うことへの賛成・反対を表すと、どのあたりになりますか。ご自身のお考えに一番近い数字を選んで、○を付けてください。 賛成・どちらかという賛成・どちらでもない・どちらかという反対・反対 ※その理由をお聞かせください。
--

表 3 学生対象のアンケート調査

<p>質問 1. 「赤鼻のトナカイ」「あわてんぼうのサンタクロース」の歌の活動での子どもの様子について、画面を通して観察されたこと、および、その様子に対する皆さんの気付き、感想などを自由に書いてください。</p> <p>質問 2. ハンドベルを鑑賞中の子どもについて、画面を通して…（以下質問 1 と同じ）</p> <p>質問 3. 自分自身や友人の語り掛け場面（学生の司会・説明）で、子どもたちとのやりとりの様子、子どもたちの反応に対する自分たちの対応などを振り返り、自由に書いてください。（例えば、子どもたちへの伝わり具合、工夫したこと、違和感など）</p> <p>質問 4. 質問と回答方法は、保育者の質問 5 と同じ。</p>

3. 2 結果と考察

回答は学生 8 名、保育者は A 園 21 名、B 園 4 名から得られた。音楽会の内容がほぼ同じであったため A 園・B 園をまとめ、保育者 25 名とした。保育者の担当クラスは、1 歳児担当が 7 名で最も多く、2 歳児担当が 4 名、その他が 3 名ずつであった (図 2)。1 つの観点について、実際に子どもを見ていた保育者と、活動を行った学生の双方の視点から検討するため、本論では質問項目ごとに両者の回答結果をまとめた。「」は記述された文章で、「」内の () は筆者による補足である。

質問 1. 歌の活動

(1) 保育者の回答

子どもの楽しそうな様子 (13 件)、画面に集中する様子 (5 件)、学生のまね、手を叩く、体を揺らす、口ずさむといった音楽に参加する様子 (のべ 29 件) が述べられ、おおむね子ども達が興味をもって参加していたことがうかがえた。以下は、担当年齢別で多様にみられた記述をまとめた。

・1 歳児担当「子どもたちが、普段お部屋などで歌っている、知っている曲だったので、未満児さんも体を動かしたり、手を叩いたりなどして、すごく楽しめていた様子でよかったです。」「画面をじっと見ていた。」

・2 歳児担当「リズムにのって体を動かすことが好きなので、(略) 体を揺らしながらニコニコ楽しそうだった。」「もっと体を動かす振り付けの方が、やりやすかったかもしれない (練習がないため)。」「手話のペースが早かった。」

・3 歳児担当「(歌の中では、説明以外の手話がたくさん出てきたので) 一緒に歌っていいのか、静かに見ていいのかも、困っていた様子だったので、歌の初めに声かけしたらよかったかなと思いました。」

・4 歳児担当「普段の保育で手話について触れることがなかなかないので、子ども達も知ることができたことと、覚えたことにとっても嬉しそうな様子でした。」

その他、学生への助言、子どもの画面の見方、参加の戸惑いが述べられていた。

・5 歳児担当「学生さんとのやり取りを、会話しながら行っている時は、子どもたちも仕草をまねて楽しんでいました (子どもの受け答えもあるので)。DVD の動画になると、テレビを見る感覚のようになるからか、動画を見入ってしまう子も見られました。」

(2) 学生の回答

3 歳未満児に関する回答では、『りりんりん』と『どんどん』の部分まねしている子どもが多かった。「(学生が伝えた) 手話が出てきた時に、遅れてやってくれていた」というように、動きを模倣する子どもをとらえていた (3 件)。一方、「(略) 振りが難しかったのか、あまりやっている子は少なかった」という回答も 1 件みられた。「保育者の協力もありながらも、自分たちのやりたいように表現したり、まねしたり、両手を動かす動作が多かった」という回答では、保育者と子どもの関係をとらえていたことがわかる。

3 歳以上児に関する回答では、「年齢が大きくなるにつれて、説明していないところまで、画面を見ながら一緒に踊って歌ってくれている子もいて、すごいと思った」(2 件)、「自分たちが話した内容を理解して、コミュニケーションをとることができた」と子どもの姿をとらえていた。また、「(略) すぐ手話などができている子どもと、そうではない子どももいて」、援助の必要を述べる回答もみられた。28 件中 11 件に「手の動きをまねしてたり、

歌を一緒に歌ったり」する子どもに対して学生は喜びなど肯定的な感情を記述しており、画面越しであったが、さまざまな子どもの姿を感じ取る機会となったといえる。

(3) 考察

手話などの動きを付けて歌をより動的な活動としたのは、2.3 リモート音楽会の実施方法で述べたように、子どもと学生と一緒に歌うことや、画面への注目を促すためであった。アンケートの回答から、未満児では「体を動かしたり、手を叩いたりなどして」楽しむ様子や、4、5歳児では「説明していないところまで」画面の学生の動きをまねるなど、多くの子どもが積極的に参加していたことが読み取れた。学生も子どもに動きが伝わったことや、歌を一緒に歌ったことに肯定的な感情がみられた。歌に動きを伴ったことで、子どもの参加を促し、一緒に音楽を楽しむことができた点で効果は評価できる。また、画面を介していることと、初めて学生と出会う行事であることから妥当であったといえよう。

一方で、1歳児では「画面をじっと見ていた」、3歳児では何をすればよいか「困っていた様子」、5歳児では「DVDの動画になると、テレビを見る感覚のようになるからか、動画を見入ってしまう子」が報告されていた。どの年齢層にも体を動かして楽しむ子どもと、画面に見入る子どもの様子が記述されており、年齢による発達段階や、子どもの興味によって参加の様子はさまざまであったことがうかがえる。しかし、「画面をじっと見ていた」と回答した保育者がその姿をどうとらえていたのか不明であった。この一見ネガティブにもとらえられるじっと見る姿の背景に、子どもが何を考え、何を感じているのか、保育者が思いめぐらして解釈し、その子どもの様子を受け止めることが、音楽活動を支える前提として重要だと考える。同様な姿は質問2のハンドベルの鑑賞でも報告されているため、総合考察でまとめていくことにする。

もう一つ、学生が観察した「保育者の協力もありながらも、自分たちのやりたいように表現(略)」していた様子を取り上げたい。これは保育者が子どもと映像画面を仲立ちし、子どもを活動に誘い掛けたり、子どもと一緒に動いてみせたりする保育者と子どもの関係をとらえていたと思われる。このような保育者の直接的な働きかけ＝援助を通して、子どもの音楽活動が支えられていく(厚生労働省 2018)。つまり、保育者は先述した子どもの受容することと共に、子どもの音楽活動を支える人的環境である。

同じく音楽活動を支える人的環境として、学生による働きかけが挙げられる。これについても質問3.交流に同様の課題がみられるため、総合考察でまとめていくことにする。

質問2. ハンドベルの演奏

(1) 保育者の回答

子ども達が興味を示す様子(14件)、ベルの音色や演奏(10件)が多く記述されていた。

- ・0歳児担当「まだベルから鳴っている音だと気づくことが難しいので、画面を見たり、後ろを見たり、キョロキョロしていました。でも、音に反応しているようには感じました。」
- ・1歳児担当「初めて聞く音、初めて見るものなので、ガン見している子もいれば、全く興味を示さない子もいた」「不思議そうに見つめて(略)、興味津々な様子で、体を横に動かしていました。」
- ・2歳児担当「ハンドベルの音色に、あれ何?と興味津々に鑑賞している様子があり、刺激になってとても喜んでいた」「ハンドベルを鳴らす手の動きをまねしていた。」

- ・3歳児担当「めったに見ないハンドベルだったので、子ども達も嬉しそう（略）」
- ・4歳児担当「聞きづらさはありませんでしたが、すごい、という声もありました。」
- ・5歳児担当「ハンドベルを聞いて、きれいと言った姿がみられました。」

(2) 学生の回答

「(略) 真剣に DVD を見て、音を聴いてくれた」という3歳以上児の様子、「ハンドベルが鳴った時に、子ども達がみんな画面を見たことが印象的だった」という瞬間の様子、年齢は不明だが「画面なので、(演奏を) 見てない子や、隣の子とお話ししてしまう子がいた(略)」という様子が観察されていた。

(3) 考察

ハンドベルの鑑賞では、0,1歳児では初めて見聞きする楽器のため、「不思議そうに見つめ」る様子や「興味津々な様子」、反対に「キョロキョロ」したり「全く興味を示さない」子どももみられた。一方、年齢の上がった子ども達からは、模倣する様子や言葉で感動を表す様子がみられた。手話のように動きがないため、ベル特有の音色や形、曲の美しさがいかに子どもの興味をとらえられるかにかかっている。そのため、年齢により興味の示し方や反応に違いが現れたと思われる。保育の領域「表現」(厚生労働省 2018, p.272) の中で示されるように、クリスマスの雰囲気を楽しむ中で、保育者や友だちと一緒にハンドベルの演奏に触れた経験は、子どもの音楽に親しむ態度を育てることにつながっていくであろう。

質問 3. 交流

(1) 保育者の回答

学生とのやり取り (15 件)、聞こえづらさ (5 件) の他、多様な観点が記述されていた。1歳児担当「プロジェクターとテレビの両方に学生さんがいて、どちらを見たらいいのか、少し戸惑っている」「画面の中からこちらに呼びかけられているということに、まだ理解ができていないようだった。」

2歳児担当「子ども達も反応に困ってしまうこともありましたが、学生さんが手を振ると、振り返ったりする姿があった。」「『この人たちどこにいるの?』と聞く子どもがいた。」

3歳児以上の担当では、学生が話す際に「一歩前に出て」「手の動作をつけて (略) ゆっくりと」行ったことに対して、わかりやすいと評価があった一方で、「画面上でのやり取りなので、もっと体を大きく動かして」見せることや、クリスマスらしい服装への助言があった。

以下は、映像や音声の不具合に対する子どもの様子を記述した回答である。

2歳児担当「(略) 画面が動かなくなる場面があり、子どもが困惑している様子だった。」

4歳児担当「音が聞こえにくいことがありましたが、子ども達もなんとか聞き取ろうと集中していました。」

(2) 学生の回答

「子どもへ話しかける時に、みんなゆっくり伝わりやすく話していた」というように、話し方への配慮や、「サンタの人形を使って」注目を集めるといった視覚的な配慮を行っていた。しかし、「もっと明るく自信ありげで」「未満児に対しては、もっとゆっくり簡単な言葉で」といった改善も述べられていた。『赤鼻のトナカイ』で、実際、子ども達とやるようにしました」というように、子どもに合わせて一緒に行おうと働きかけていたことが読み取れ、それに対して、子どもが「まね」や「大きく反応してくれた」ことに喜びが述

べられていた。

(3) 考察

学生は画面を通した子どもとのやり取りの中で子どもに伝わることを意識し、話す速さをゆっくりにしたり、人形を使って視覚的な工夫をしたりしていた。しかし、学生自身が「もっと明るく…」など改善を挙げており、また、保育者からも指摘があった。これについての考察は、質問 1. で挙げた学生による働きかけとともに、総合考察で行いたい。学生はハンドベルが目立つように意図的に黒い上衣を選んでしたが、保育者からは服装への助言もあった。行事を意識した服装がよいのか、注意を引く色がよいのか、見る側にどう映るか、ねらいと照らしながら考えるべきであろう。

学生とやり取りする子どもの様子については、年齢によって傾向が異なっていた。1 歳児では戸惑う様子や理解ができていない様子が述べられていた。2 歳児になると学生に手を振り返したり、「この人たちどこにいるの？」と聞いたりする姿がみられており、受け答えに現実味が加わっていた。また、映像や音声の不具合に対しても、2 歳児担当は「子どもが困惑している様子」を述べたのに対し、4 歳児担当は「なんとか聞き取ろうと集中」したと述べ、年齢によって不具合への対応が異なることがうかがえた。さらに、3 歳児以上の担当が学生の工夫をわかりやすいと評価した背後には、子どもの聞き取りに大きな問題がみられなかった可能性が考えられる。

以上から、年齢の低い子どもが画面を見ることや映像の理解に難しさがあると考えられ、オンラインでの交流を主体的に楽しむために、適した年齢発達があると推測される。

質問 4. 音楽会終了後の子どもの様子（保育者のみ）

(1) 保育者の回答

「あった」と回答したのは 25 件中 14 件で、内訳は 0 歳児担当 0/3 件（以下担当は省略）、1 歳児 3/7 件、2 歳児 2/4 件、3 歳児 3/3 件、4 歳児 3/3 件、5 歳児 1/3 件、担当未記入 2/2 件であった。14 件全てに「そのときの様子」が記述されていた。2 歳以下の回答には「手話」という言葉は使われず、「踊る」と書かれてあった。

1 歳児担当「教室に戻ってから、楽しそうな顔で踊ったり、遊んだりしていました。」「『歌知ってた』や、ロズさんでいる子（略）」「（保育者が）歌うと一緒に動いてみたりする様子」

2 歳児担当「ハンドベルの手の動きをまねたり、保護者に『リンリンで鳴ってた』と伝えていた」とお迎え時の様子が報告されていた。

3 歳児担当「終わった後も、お部屋で歌うときも手話をしていた」「手話を見よう見まねで、歌いながら行なっていた。」

4 歳児担当「『真っ赤なお鼻のトナカイさんは』の部分を真似して、お友達同士で楽しんでいました」

(2) 考察

終わった後にも、保育者の歌に触発されて動いたり、歌の場面で自然と手話が現れたり、友達同士で手話を付けて歌ったりする様子が報告されていた。2 歳ではお迎えの保護者にハンドベルのことを伝えた子どもが報告されていた。これらの様子から、音楽会での経験が子ども達の記憶に強く残り、日常の中での子ども達の自然な表現の源泉となっていたといえる。また、子どもの動きについて 2 歳以下の回答では「踊る」、3 歳以上では「手話」と

という言葉が使われていたことは、子どもの動きの発達による変化の表れではないかと考える。なお、0歳児に回答がなかったのは、表現の読み取りが難しいためと考える。

質問 5 (学生は質問 4). オンラインによる音楽会への考え

図 4 は保育者の、図 5 は学生の回答結果である。ここでは賛成・反対を問うのではなく、その背景にある考えや視点を探ることが目的であった。

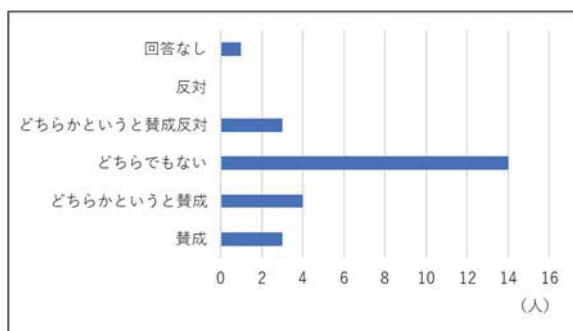


図 4 保育者の回答

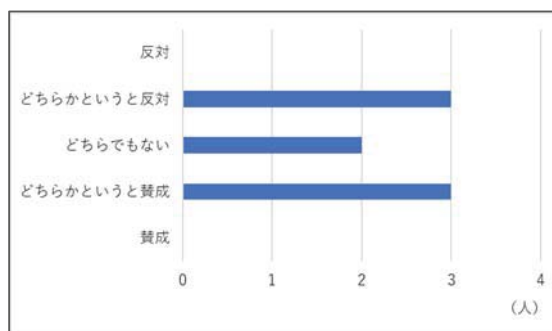


図 5 学生の回答

「賛成」は保育者のみで、3件とも「子ども達は喜んで楽しく参加する」という理由であった。

「どちらかという賛成」の保育者は、「どのような形であっても(略)いろいろな人との接点を持つことに意義がある」という関わりの機会(2件)、「今後はオンラインによる保育も必要になってくるのではないか」という将来的展望(1件)、感染防止のため「仕方がない」(1件)を理由に挙げた。学生では、対面の方がよいとしつつ移動の負担がないこと、「お互いに顔を見て」表情から気持ちを理解できると述べられた。

「どちらでもない」の保育者では、「オンラインという方法もよいが」としつつ、「やはり子ども達には、実際に楽器の生の音を耳や肌、体全体で感じさせてあげたい」「(学生が)子どもの反応を肌で感じたり、子ども達も学生さんともっと身近に接すること」ができればよいと述べ、大半が可能なら対面を推していた。賛成できない理由として、画面が止まることなどが挙げられた。0歳児担当からは、「歌や音楽に興味を示していたが、まだどこを見ていれば楽しいことが始まるんだ、と認識できないので、実際に近くで見て、手振り身振りアピールしていただけた方がいい」と述べられていた。学生では、「オンラインで子どもと音楽に関わる」ことや「保育現場に慣れるため」と肯定しつつ、「実際に子どもを前にして演奏をしたい」と述べられていた。

「どちらかという反対」の保育者は、演奏や交流を「直接」「生で」行いたいとする意見が目立ち、「子どもたちの感じ方や楽しみ方も素晴らしいものになる」と子どものメリットを挙げていた。学生では「会場や電波」の問題や「機械」の準備の大変さの他に、「(子どもの)反応をしっかり見たい」「音の本質を聞かせてあげられない」「音楽で何かを伝えるのはやはり対面に限ると思うんですが、オンラインであっても、音楽の楽しさを伝えられると思う」という多様な意見の中に音楽への言及がみられた。

(2) 考察

賛成傾向では、音楽会の楽しさや、顔を見て人と交流できることが着目されていた。「ど

ちらでもない」や反対傾向では、子どもと学生が直接ふれあうことや、生で音楽を聴くことについて、「肌」や「体全体」で感じる大切だとする信念や、音の本質や音楽で何かを伝達するといった質的な視点が重視されていた。0歳児担当からは画面越しの難しさが示唆された。全体的に、通信機器の不具合による滞りのデメリットと、移動の負担がないメリットが散見された。また、リモート音楽会によって、離れていても子ども達と「音楽の楽しさ」は共有できると感じられていた。

4 総合考察

これまでアンケート調査から、リモート音楽会において乳幼児が音楽の活動にどのように参加していたか（質問 1.2）、相互交流がどのように行われていたか（質問 3）、音楽会がどのような影響を与えたのか（保育者質問 4）、参加した保育者および実施した学生がどのように感じたり考えたりしたのか（質問 1~3、保育者質問 5、学生質問 4）、明らかにしてきた。子どもたちはおおむね保育者や友達と音楽を楽しんでおり、また、音楽会での経験は、日常の中での子ども達の自然な表現にも影響を与えていた。リモート音楽会の実施は、さまざまな人間関係の中で音楽に親しんでいく機会（厚生労働省 2018）であり、クリスマス行事と生きた音楽が結びつく文化的経験となった。また、手話ソングやハンドベルのような珍しい楽器と有意義に出会うことができた。リモートであっても音楽と触れることは、子どもの表現にさまざまな学びをもたらすことができたとはいえよう。

そのような中で、質問 1,2 では歌やハンドベルの活動場面で画面に見入る子どもの様子が挙げられ、それを保育者がどのように解釈するのか、また、質問 1,2,3 では学生の働きかけの課題が挙がっていた。ここでは、子どもの音楽活動を支える人的環境としてこの 2 点について考察したい。

4. 1 子どもの様子から考える保育者の役割

1 点目に子どもが画面を見入ることをどう解釈するか考える。初めて見る手話や演奏が映し出される画面をじっと見る姿について、心を動かされて思わず食い入っているのか、情報を読み取ろうと観察しているのか、何が始まったのか理解できず不安に見ているのか、あるいは、テレビをぼんやり見るのと同じであったのかなど、画面をじっと見る子どもの内側はさまざまに想像できる。保育者はふだんの生活から子どもの内側を想像し、その姿を柔軟にとらえて解釈することが重要である。そして、それがどのような学びにつながっていくのか考え、学びにつなげる援助を行える力量が求められているのである。つまり、じっと見るという子どもなりの表現（厚生労働省 2018）を保育者が受容して保障することは、表現の育ちを支える一つであると考えられる。

2 点目に、特に未満児にとって画面を見ることや理解することの難しさが挙げられた。そこで、子どものテレビ画面の認識の発達の視点からリモートの画面を通じたコミュニケーションを考察したい。メディアリテラシーの発達についての研究（鈴木 2008, p.182-183）によると、3 か月頃から画面注視が始まり、6 か月前後でテレビへの関心が芽生え、1 歳は表情や音声の意味を理解し、形や色、空間的關係がわかるようになる。2、3 歳で音声の認知と理解が進み、音楽や音の再現、情緒的反応や行動的反応をするようになり、3 歳から 5 歳頃でフィクションとノンフィクションの違いが理解され始める。木村（2008, pp.160-164）は、5,6 歳くらいになっても映像世界に意識を集中すると、画面の中の映像世界と自

分のいる現実世界の二つが連続して感じられてしまうのではないかと推測している。

この発達に今回観察された子どもを重ね合わせると、0歳児や年齢の低い子どもが画面をじっと見ていたことは自然な姿であり、その姿をどう受け止め、音楽活動として支えるかが大人の課題となる。これを後述する。1,2歳児が画面に映る学生の表情を理解し始め、音や映像に注目し、保育室に戻っても覚えた歌や動きで遊ぶことができた。家で観るテレビとの違いに不思議な感じがしたかもしれないが、3歳頃からの子どもたちは、画面の中の学生のお姉さん達とリアルタイムにコミュニケーションしながら、そばにいる現実の保育者や友達ともコミュニケーションしていたことは、子どもが映像に集中していたなら、連続したつながりとしてとらえられていたと考えられる。また、同時双方向でのコミュニケーションは子どもの記憶に残りやすい(坂田・川合 2004)ため、演奏動画の導入として同時双方向の交流は有効だったのではないだろうか。

3点目に、テレビは大人と共同視聴によって、子どもと思考や会話の機会とすることが望ましい(堀内 2006, p.180)。リモート音楽会で考えると、質問1の考察で述べたように、保育者が子どもと画面の仲立ちとなって活動へ誘い掛け、子どもと一緒に動いて共感的関係を作ることは、保育者の役割として重要といえる。特に画面を見ることが難しい未満児の子どもには指さししながら一緒に歌ったり、動いて見せたり、話をしたりすることも有効である。もちろん、子どもがじっと画面を見て情報を取り込んでいるなら、時にはそれを見守ることも必要である。

先述した子どもの姿の受容とともに、保育者の直接的な働きかけは、子どもの音楽活動を支えるために重要な保育者の役割と考える。

4. 2 学生の働きかけと音楽性

子どもを音楽活動に促すよう、歌の活動において手話などの動きを取り入れたり、ハンドベルの活動を組み込んだりして、プログラムの内容を工夫した。さらに、プログラムの提供においても、演奏動画を録画する際に、学生が子どもに向けて働きかけることを意識していた。これに加え、先述したように、学生と子どもが同時双方向のコミュニケーションを行いながら演奏動画を視聴したことは、単なる音楽ビデオの視聴以上に、子どもの音楽活動を支えた要因の一つと考える。しかし、特に未満児対象のプログラムでは、学生なりに歌を短くし、テンポを遅くしたにもかかわらず、2歳児担当からは手話の速さの指摘や、体を動かすような大きな振り付けを進める助言があった。そこで、音楽活動でよりよい働きかけをするための音楽的な技能について考えたい。

1点目は、その働きかけが画面の向こうで子ども達にどのように伝わるか、という視点をもつことである。練習の段階で、感覚的に遅いと考えたテンポや、学生自身の演奏、動き方を録画して客観的にとらえ直す作業をすることで、この視点は養われるであろう。未満児では、発達を元に動きを丁寧に考えることも大切である。

2点目に、曲の中の手話が出てくる部分のテンポを少し緩めて誘い掛けることで、子どもが安心して動きを付けることができる。安心して動くことができるとは、子どもが歌や動きの主体となって音楽活動に参加できる状態と言い換えられ、それは子ども自身が楽しいと感じることにつながるであろう。つまり、テンポを少し緩めるという、音楽のゆらぎの感覚を保育者が身に付けることで、子どもの動きに合わせてたり、音楽に誘ったり、子どもを音楽そのものに惹きつけることができるのである。このような保育者の音楽性が非常

に重要なのだと考えられる。

4. 3 まとめ

これまでの考察から、子どもの音楽活動を支えていく人的環境としての保育者の役割に、多様な子どもの姿を解釈して受容すること、音楽活動に誘うため直接的に働きかけることの2つの援助の重要性が見出された。さらにその働きかけにおいては、保育者の音楽性が大きな力を発揮すると考えられた。今回、画面を介することで着目されたこれらの点は、通常の対面の保育の音楽活動にも共通することであり、今後の保育者養成教育の質的な充実にも活かせることである。保育者が子どもの音楽活動を支えるために、音楽的なニュアンスを感受し提供できる音楽性を養い、その子どもにとって今、どのような受容や働きかけが必要なのか考えられるよう養成教育を行いたい。

最後にリモートでの音楽会の実施についてまとめたい。乳幼児期は実体験から体験的に学ぶことが重要な時期であり（木村 2008, p.166）、乳幼児にとって演奏者（歌を歌ったりピアノやギターを弾いたりする保育者）との触れ合う中で人が演奏する様を見聴きし、音の響きや音楽を感覚的に受け取りながら一緒に音楽することを楽しむことが大切で、音楽活動は対面が最も望ましいといえる。しかし、これまで考察してきたように、今回のリモート音楽会は子どもにとって友達や保育者、学生といったさまざまな人と音楽で交流しながら、文化的、社会的な機会を提供でき、日常生活での自然な表現に影響を見出すことができた。今回のようにコロナ禍においてリモートで音楽会を行ったことは、子どもの学びを止めることなく、今できることの最善であった。今後、ICT化の進化と普及によって、海外のような遠隔地や希少・高価なものなど実体験が難しい場合にも、オンラインの利用やバーチャル体験を行っていくことで、子どもの世界を広げてくれるであろう。その際は、慎重に内容や実施方法、援助の方法を検討しながら活用することが求められる。

また、音楽会という特別な機会で子どもが表現を深められたのは、日ごろから蓄えられた音楽活動の豊かさが子どもたちの根底にあったからであった。保育現場への音楽会などを企画する際は、園の保育と連携を図り、日常とのつながりを考慮することも大切である。

謝辞

リモート音楽会の実施と、アンケート調査にご協力くださったA保育園、B保育園の園長先生、保育者の皆様、そして、学生の皆様に感謝申し上げます。

付記

本稿は令和3年度日本音楽教育学会第52回京都大会において発表したものに修正・加筆したものである。

【注】

- 1) Schulmerich 社製イングリッシュ・ハンドベルを使用した。
- 2) 永田美加編（1999）『手話でつたえたい歌 BESTSELECTION』民衆社より「赤鼻のトナカイ」の手話の一部を省略・変更した。

【引用・参考文献】

Weblio 辞書「オンライン」

<https://www.weblio.jp/content/%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3>

Weblio 辞書「リモート」

<https://www.weblio.jp/content/%E3%83%AA%E3%83%A2%E3%83%BC%E3%83%88>

伊藤嘉子 (2002) 『手話でうたおう子どもの歌 幼児・低学年の四季の歌, 行事の歌』音楽之友社.

木村加奈子(2008) 「3 子どもはどのようにテレビを見ているのだろうか」『資料でわかる認知発達心理学入門』加藤信義編, ひとなる出版.

厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』3歳以上児の保育 才感性と表現に関する領域「表現」(イ)内容, フレーベル館.

坂田 陽子・川合 伸幸 (2004) 「対話を伴うビデオ映像を幼児はよく憶えるか?」『発達心理学研究』15 (3), pp.376-384.

鈴木佳苗 (2008) 「メディアからの学び」『よくわかる乳幼児心理学』内田伸子編, ミネルヴァ書房.

堀内ゆかり (2006) 「テレビとその影響」『グラフィック乳幼児心理学』岩井邦夫・高橋道子・高橋義信・堀内ゆかり, サイエンス社.